

日本短期研修を通じた
日本語習得と日本語に対する意識
－台湾の日本語学習者を例として－

村上 敬一

Japanese Acquisition and Consciousness of Japanese
through Short-term Training in Japan
- Japanese Learners in Taiwan-

MURAKAMI Keiichi

Abstract

This case study is targeted at the Japanese learners in Taiwan which participated in short-term training in Japan in July, 2013. The questionnaire was carried out to them in order to clarify the following:

Through their experiences in Japan,

1. How did they master/improve Japanese?
2. What kind of consciousness did they hold to Japanese?

The main conclusion is the following:

1. During the training period, learners increased the vocabulary of Japanese to be used, and tried to change their pronunciation, and noticed the difference between the grammar of their mother tongue and that of Japanese.
2. In communication with Japanese in Japan, they tend to focus on the appropriateness rather than the correctness.
3. Many of the learners are positive in learning the dialect. The reason is that the dialect plays an important role in the actual oral communication in Kansai area, and this fact is recognized by them through their own experiences.

1 はじめに

本論は、台湾の大学生日本語学習者における、日本での短期研修を通じた日本語受容と、日本語に対する意識、日本人とのコミュニケーションに対する意識の一端を明らかにするものである。

具体的には、2013年夏に関西地方のK大学で行われた短期研修（サマープログラム）に参加した、台湾・Y大学の学生を対象とするアンケート調査結果から、日本語を用いた日本人とのコミュニケーションに対する意識や、身近な日本人の日本語に対する観察、日本語の方言に実際に触れたあとの印象・感想などについて概観し考察を行う。

2 台湾における日本語教育の現状

論を進める前に、台湾における日本語教育の現状について簡単にまとめる。

国際交流基金による2011年度「日本語教育国・地域別情報」および「2012年 海外日本語教育機関調査」（速報値）によると、台湾の日本語学習者数は232,967人で、英語に次いで学習者の多い外国語となっている。

学習機関別にみると、高等教育機関が約120,000人と最も多い。外国語教育政策と若者の「日本ブーム」の影響を受け、中等教育機関における日本語学習者も約77,100人、塾などの学校教育以外の機関での学習者も約48,200人を数える。日本語能力試験の受験者数は2010年度には約54,000人となっていて、台湾の総人口（約2,300万人）に占める割合からすると、その数は世界最高水準にあるといえる。

日本語学習の目的は、初等・中等教育で「機関の方針」が50%を超えるのに対して、高等教育では日本人との〈交流志向〉から「コミュニケーション」が約30%と高くなっている。「日本語そのものへの興味」「歴史・文学に関する知識」「政治・経済に関する知識」といった〈知識志向〉が約10%あるほか、大学等への「受験準備」、「将来の就職」といった〈実利志向〉もみられる。

3 調査の概要

3-1 調査の実施・対象

アンケート調査は、留学生の帰国前々日、前日にあたる2013年7月21日と22日に、研修宿泊先において留学生の承諾を得て実施した。研修に参加した18名の留学生（台湾Y大学15名、韓国C大学5名）のうち、アンケート調査に回答のあった台湾Y大学13名の調査結果を考察の対象とする。

3-2 調査内容

以下、実際の調査票に従って調査内容について簡単に説明する。

調査票

〈フェイスシート〉

1. 氏名（ ）さん
2. Y大／C大 学校 年生
3. 年齢 歳
4. 日本語学習歴 年
5. 日本語のレベル ⇒ N
6. あなたのパートナーの名前（ ）さん

日本語学習歴やレベルと、調査結果の相関は当然注目すべきであるが、今回は被調査者が少なかったことと、日本語能力試験の未受験者が多かったため、個人における学習歴とレベルと調査結果の相関については、本論では考察の対象としない。ちなみに、日本語能力試験合格者のレベル内訳は、「N1」1名（韓国）、「N2」5名（台湾3名、韓国2名）、「N3」4名（台湾）「N4」1名（台湾）であった。

「6. あなたのパートナー」とは、「日本語パートナー」と呼ばれる、研修期間中に留学生の補助をするK大学の学生のことをいう。研修期間中における、もっとも身近な日本語母語話者であり、留学生の日本語に大きな影響を与えられるので、回答を求めた。日本語パートナーとの接触時間や出身地などの情報を得るためにパートナー用の調査票を準備したが、諸事情により回答が

得られなかったので、これも考察の対象とはしない。

冒頭でも述べたように、本調査は、日本短期研修の経験を通じた日本語受容の実態と、日本語に対する意識、日本人とのコミュニケーションに対する意識をみるために行ったものである。各設問の意図や趣旨は、以下の通りである。
() は質問番号を示す。

1. 日本語を用いた、日本人とのコミュニケーションに対する意識。(①)
2. 現在の習得言語における、身近な日本人の日本語の影響とその意識。(②, ③)
3. 日本語習得における方言の意義と必要性に対する意識。(④, ⑤)
4. 留学中の身近な日本人の日本語に対する観察(⑥)
5. 留学中における自身の日本語に対する内省。(⑦ i ~ iv)
6. 日本語の方言に、実際に触れたあとの印象、感想。(⑧)

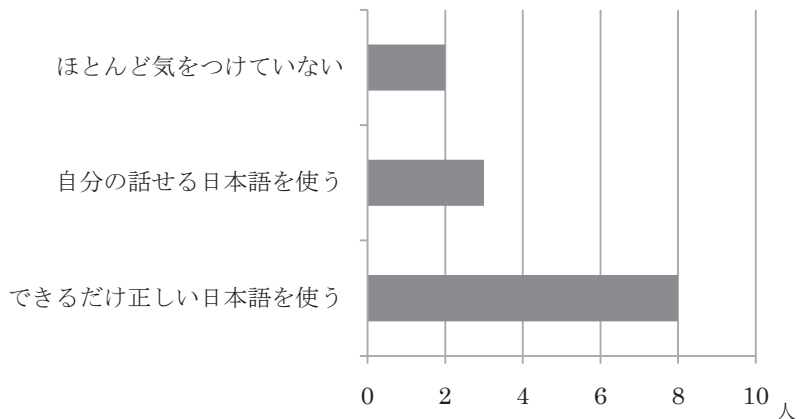
質問①から⑤が「言語意識」に関わるもので、選択式で回答を求めた。質問⑥から⑩は、具体的な日本語の受容に関わる設問で、自由記述式である。

3-3 調査結果の考察

質問① 日本人と話をするとき、どのようなことに気がつけましたか？

1. できるだけ正しい日本語を使おうとした。
2. 間違えてもいいから、自分の話せる日本語を使おうとした。
3. ほとんど、気をつけることはなかった。
4. その他 ()

日本人との日本語を使ったコミュニケーションにおいて「正しさ」つまり形式を重視するか、あるいは「ふさわしさ」つまり内容を重視するかをたずねる設問である。



「できるだけ正しい日本語を使う」の回答が相対的に多く「自分の話せる日本語を使う」は少ない。正しい日本語を使おうとする、ことばの正しさに対する規範意識が強く、自分の可能な範囲でコミュニケーションを図ろうとする、コミュニケーション能力重視の傾向は低いといえる。

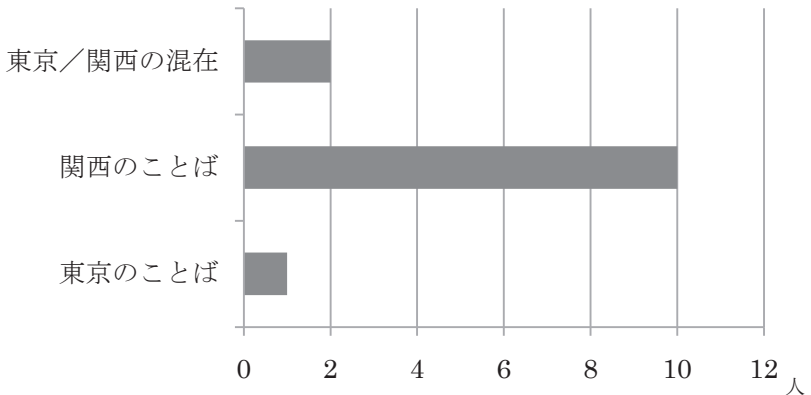
関連して、日本語母語話者の意識を明らかにしたものに『国語に関する世論調査』の1995年調査がある。「外国人の話す日本語は、どのような日本語がましだと思うか」という質問に対して、「外国人だから、意思が通じさえすれば多少変な日本語でもかまわない」が58.6%、「どんな日本語でもかまわない」が24.2%の結果となっている。80%以上の日本人は、外国人の日本語に対して寛容な考えをもっているということである。

質問② あなたのパートナーの日本語は、以下のどれにいちばん近いと思いますか？

1. 東京のことば
2. 関西のことば
3. 東京のことばと関西のことばが混ざったことば
4. その他 ()

先述のとおり「あなたのパートナー」つまり「日本語パートナー」は、研修

期間中におけるもっとも身近な日本語母語話者である。研修期間中に、日本語パートナーの日本語が留学生の日本語にどの程度影響を与えたかを問う設問である。

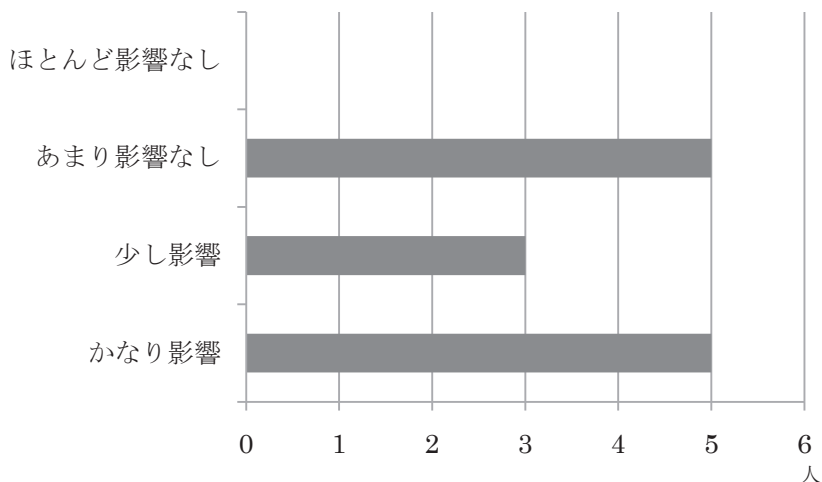


留学生からみた日本語パートナーの日本語は「関西のことば」とするものが圧倒的に多く「東京/関西のことばが混在」するものとしてとらえられるものも合わせれば、日本語パートナーの日本語はほぼ関西方言であったことがうかがえる。K大生の出身地は、関西の中枢をなす兵庫県と大阪府の出身者がおよそ9割を占め、日常の話しことばコミュニケーションは、いわゆる関西方言である。調査結果から、日本語パートナーは、ふだんの話しことば、つまり関西方言で留学生にも接したことがここから推察される。

③ あなたのパートナーの日本語は、あなたの日本語にどのくらい影響したと思いますか。

1. かなり影響した
2. 少し影響した
3. あまり影響しなかった
4. ほとんど影響がなかった

質問2と同じく、日本語パートナーの日本語が留学生の日本語にどの程度影響を与えたかを問う設問である。



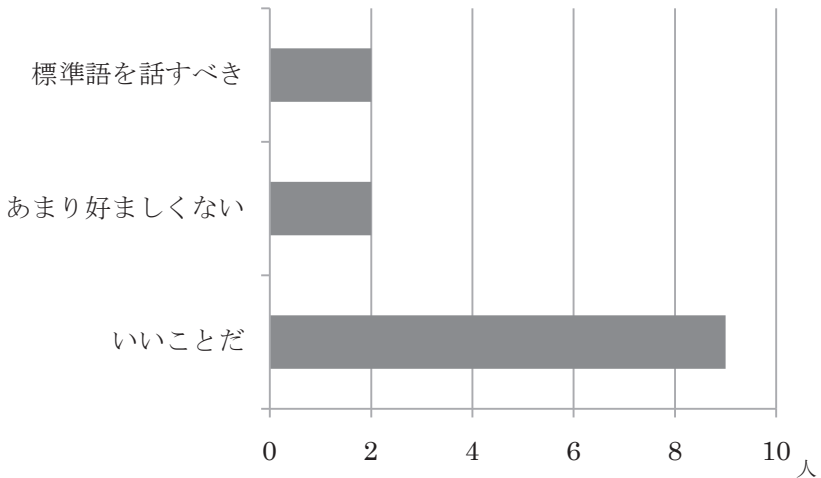
「ほとんど影響なし」の回答はなく、「あまり影響なし」も全体の3分の1にすぎない。日本語パートナーの日本語が、留学生の日本語に少なからず影響を与えていることを、調査結果は示唆している。

ここでも、日本語のレベルとの相関は特にみられないが、自国で学んだ、学習言語としての日本語とは違う異質の言語、関西方言を用いたコミュニケーションは、留学生にもいくらかの刺激になっていることもうかがえる。

④ 留学生が方言を話すことについて、どう思いますか。

1. いいことだ
2. あまり好ましくない
3. 標準語を話すべきだ
4. その他 ()

関西における日常の話ことばコミュニケーションに「関西方言」が不可欠であることを受けて、日本語学習者における方言使用の意識をたずねる設問である。

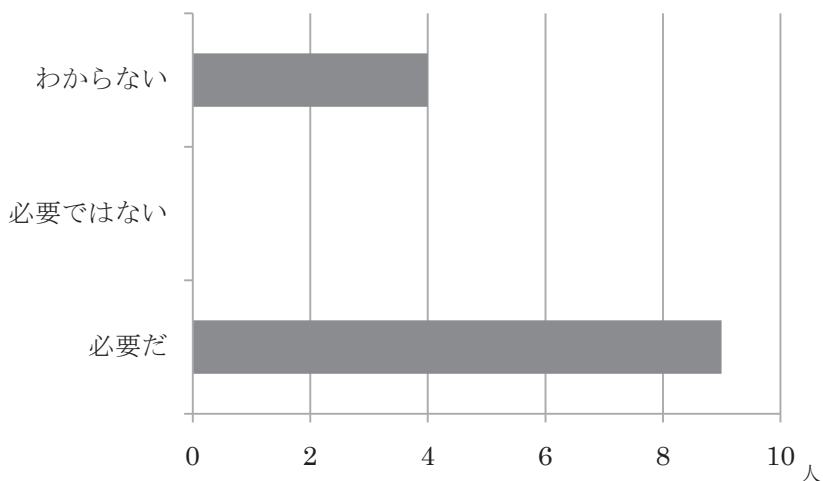


「いいことだ」とする回答が多くを占め、学習言語としての日本語（標準語）のみならず、方言がコミュニケーションの上で重要な役割を占めることを、留学生は実際に体験し学んだことが推察される。これは、研修先が、方言の勢力がことさら強い関西であったことも影響しているであろう。自国で学んだ日本語とは異なる方言を知ること、日本語の学習意欲がさらに高まることも期待される。

⑤ 留学生（日本語学習者）が、方言を勉強することは必要だと思いますか。

1. 必要だ
2. 必要ではない
3. わからない

関西方言コミュニケーションを実際に経験した上で、方言を勉強することが必要かどうかを問うものである。



「必要である」とする回答が多数を占め、ここでも、方言がコミュニケーションの上で重要な役割を占めることを、実際に体験し学んだことが背景にあるだろう。

日本語教育における方言教育については、20年以上も前から議論が続いているところである。方言の日本語のバリエーションとしての必要性、コミュニケーション上の必要性を説きつつ、それをだれにどのように教授するか、といったことを考えていかなければならないであろう。

ここからは、自由記述の設問における回答である。()は複数回答のあったもので、人数を示す。原則として、回答のあったものをそのまま記述するが、一部趣旨の変わらない範囲で改変したものがある。

⑥ 日本語パートナーやホストファミリー、松蔭の先生たちの日本語で、気になったことを自由に書いてください。

(⑥-1) 敬語はやはり不可欠か

(⑥-2) 話すとき、速い(2)

(⑥-3) 関西のことば、ちょっとわかりません、関西弁むずかしい(2)

音声言語の特徴として、話しことばの速さ、声の高さに言及するもの(⑥-

2)、コミュニケーションを円滑に行う上での敬語の必要性(⑥-1)や、日常生活場面における方言の出現に対する困惑のようなもの(⑥-3)が回答として挙げられた。教室の日本語とは違った日本語、方言に触れての戸惑いである。

⑦ 研修期間中、あなたの日本語にどのような変化がありましたか。以下の項目ごとに、できるだけ具体的に書いてください。

i 単語・語彙

(⑦-1) たくさんのことばを覚えた

単語・語彙については、使用語彙、理解語彙の増加を挙げるもの(⑦-1)一例のみであった。

ii 発音・アクセント

(⑦-2) もっと自然になった

(⑦-3) 関西弁はちょっと影響

発音・アクセントについては、具体的な経験を通じた自身の変化に対する気づき(⑦-2, 3)を挙げたものがみられた。関西方言の影響(⑦-3)は、肯定的な意見なのか否定的な意見なのかはここでは判断できないが、習得途上における異なった音声言語のインプットが、習得にマイナスに働くことがなかったか懸念される。

iii 文法

(⑦-4)「の」の使い方は、自身の母語と対照することによる気づきである。母語の「的」との比較対照を実際の日本語によって再認識し、また改めることもあったのではないだろうかと思われる。

⑦の設定では、最後にその他の気づきを列挙してもらった。ここでは、その内容を以下に記述するにとどめる。

iv その他（言語に伴うジェスチャー、振る舞い、表情など）

(⑦—16) 「ない」と言ったとき手を振る

(⑦—17) ごますりが上手

⑧ みなさんが学習したこととは違い、関西方言にどのような感想をもちましたか。具体的に教えてください。

この設問は、日本語パートナーやホストファミリーなど、今回の研修で身近な日本語母語話者から直接見聞きした関西方言についての感想をたずねるものである。

(⑧—1) かわいい (4)

(⑧—2) おもしろい (4)

(⑧—3) とても親切

(⑧—4) 勉強したい

(⑧—5) 感情を示しやすい

(⑧—6) 情熱的

(⑧—7) 妙に萌える

(⑧—8) むずかしい、急に覚えぬい

(⑧—9) はやい

「かわいい」(⑧—1)と「おもしろい」との回答が4名の学生からあった。関西方言自体がかわいい、おもしろいのか、あるいは、その話し手である日本語パートナーがかわいい、おもしろいのか、ここでは判断できない。しかしながら「とても親切」「親しい感じ」(⑧—3)、「感情を示しやすい」(⑧—5)などととも、関西方言に対して積極的に情的な価値を見いだしていることが明らかとなった。

教室の日本語とは異なる方言に触れることで、さらなる、新たな学習意欲をかき立てられたこともうかがえる(⑧—4) いっぽうで、標準語とは違う難しさを実感しているのも確かである(⑧—8, 9)。

⑨ このほか、研修期間中の、日本語に関する全般的な感想がありましたら教えてください。

こども、その内容を記述するにとどめるが、留学生たちが研修を堪能した様子、充実した2週間を過ごした雰囲気が伝わってくるものと思う。同時に、これからの日本語学習にも、よりいっそう精励する様子も、うかがうことができる。

- (㊹-1) もっと関西弁を勉強したいです。
- (㊹-2) 台湾に帰りたくないです。
- (㊹-3) 日本語に関するのはあまりないかな～。
- (㊹-4) 今回日本に行ってほんとうによかった。
- (㊹-5) 方言は必要です。
- (㊹-6) たぶん叫力が成長しました。

4 終わりに

本論は、2013年夏に関西K大学での研修に参加した、台湾Y大学の学生を対象としたアンケート調査の結果に基づき、日本短期研修の経験を通じた日本語受容の実態と、日本語に対する意識、日本人とのコミュニケーションに対する意識を考察した。

今後の課題としては、この研修で習得した日本語や日本での経験が、

- i 帰国後の日本語使用に、どのような影響を与えているか。
 - ii 日本語学習のさらなる動機付けに対して、どのように作用しているか。
- など、継続的な観察が必要となると考える。

今回得られたアンケート調査の回答について、その背景にある日本語パートナーやホームステイ先との具体的な交流、やりとり、日本語のインプットについても明らかにする必要があり、フォローアップ・インタビューなども考えなければならない。研修の経験を背景とした日本語習得の進展、日本語に対する意識の変化、日本人とのコミュニケーションにみられる変化など、今後とも継続して観察し記録していくことで、このような研究の普遍性も図っていきたい。

〈謝辞〉

本論をなすにあたり、アンケート調査に協力してくださった台湾Y大学、韓国C大学校のみなさん、および、調査の趣旨を理解し、調査の実施にご協力くださった関係各位に、ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 上仲淳(2010)「日本語のバリエーションの運用能力を向上させる試み:台湾の大学における授業を通して」『日本語教育方法研究会誌 17(1)』日本語教育方法研究会
- 生越直樹(1991)「日本語教育と方言」『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社
- 佐治圭三(1988)「日本語教育における位相の問題-日本語教育と関西方言との関わりを中心に-」『国語学 154』国語学会
- 真田信治ほか(1992)「特集 方言と日本語教育」『日本語教育 76』日本語教育学会
- 渋谷勝己ほか(2007)「特集 日本語のバリエーションと日本語教育」『日本語教育 134』日本語教育学会
- 備前徹(1993)「日本語教育における方言」『日本語教育指導参考書 20 方言と日本語教育』国立国語研究所
- 文化庁文化部国語科(1995)『世論調査報告書平成7年4月調査 国語に関する世論調査』大蔵省印刷局

参考 URL

- <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>
- <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/taiwan.html>